

「その名はイエシュア」

ルカの福音書 1:23~38

はじめに

今回は、ザカリヤによる神殿での祭司の働きを見ました。するとそこに表されていたものは、旧約時代からの習わしや教えなどではなく、未来についての預言、ヨハネの黙示録 8:3~4 に結びつく、世の終わりに起こる神のご計画の一つを表したものでした。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

8:3 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。

8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

この神の御前に立ち上る「たくさんの香」そして「聖徒たちの祈り」、これは新しいいのち、永遠のいのちによみがえらせられ、天に上る、引き上げられる人々を表した「型」たどえであり、それはすなわち「イエシュアの空中再臨」による「教会の携挙」を表したものです。神殿におけるザカリヤの描写はこの事実を指し示していたのです。

そしてそのザカリヤのもとに御使いガブリエルが現れ、神の御言葉、ご計画を伝えます。しかしザカリヤがそれを信じなかったために、御使いは彼の口をきけなくしてしまいました。しかしこれは彼への罰でも戒めでもなく、これもまた神のご計画を表した一つのしるしであったのです。「口がきけなくなる」という意味のヘブル語アラムとは本来、イスラエルの子らを「束ねる、集める、結ぶ（創世記 37:7）」という意味の言葉であり、神はやがて「教会の携挙」に次いで、その後イスラエルの民をもご自分のもとに集められることをザカリヤのうちにしるしとして表されたのです。しかしそれは「携挙」のように天に上らせるものではなく、地の作物の収穫のように、地上において集められるものであり、それはつまり「イエシュアの地上再臨」によるイスラエル王国の復興、再建を表したものであると述べました。このように、話の内容としてはザカリヤとエリサベツの間にヨハネという男の子が生まれるというのですが、そこにはメシアであるイエシュアとその働き、御業によって成される神のご計画がどのようなものであるかということが秘められているのです。この流れを踏まえつつ、続く今日の内容にも入ってまいりましょう。

1. 恥を取り除く

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:23 やがて務めの期間が終わり、彼は自分の家に帰った。

1:24 25 しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。そして、「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と言い、五か月の間、安静にしていた。

ザカリヤは神殿での務めを終え、「家に帰った」とありますが、これは単なる状況説明ではありません。続くエリサベツの言った言葉に結びついて、神のご計画を指し示しているのです。エリサベツは身ごもり、

「私の恥を取り除いてくださいました」と言っていますが、同様のセリフをアブラハムの子イサクの子ヤコブのその妻ラケルが言っています。

創世記【新改訳 2017】

30:22 神はラケルに心を留められた。神は彼女の願いを聞き入れて、その胎を開かれた。

30:23 彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言った。

30:24 彼女は、その子をヨセフと名づけ、「【主】が男の子をもう一人、私に加えてくださるように」と言った。

30:25 ラケルがヨセフを産んだころ、ヤコブはラバンに言った。「私を去らせて、故郷の地へ帰らせてください。

30:26 妻たちや子どもたちを私に下さい。彼女たちのために私はあなたに仕えてきました。行かせてください。あなたに仕えた私の働きは、あなたがよくご存じなのでから。」

これはヤコブすなわちイスラエルが叔父のラバンの家に仕えていた時のものですが、ヤコブはラケルが身ごもり、ヨセフを産んだことによって故郷の地に帰ることを決意しています。イスラエルとその妻と子らがカナンとも呼ばれる故郷の地に帰ることと、ザカリヤが家に帰ることがエリサベツとラケルの言葉によってつなげられ、神のご計画がイスラエルの民を「故郷の地へ帰らせ」ることにある、ということが強調されているのです。

また「私の恥を取り除いて」、「私の汚名を取り去って」と訳されているヘブル語アーサフ(אָסַף)は本来、「集める、収穫する(創世記 6:21)」という意味の言葉であり、先に述べたザカリヤの「口がきけなくなる」アーラムの本来の「束ねる、集める」という意味と見事に合致します。このように、神のご計画がイスラエルの民を集め、そして彼らの故郷の地に帰らせることにある、ということが繰り返して強調して表されているのです。

2. 五か月

さらにエリサベツが「五か月の間、安静にしていた」ともありますが、これは早産や流産のリスクが減る安定期が妊娠四か月以降と言われているので、彼女は不妊の女性でしかも高齢であったため、もう一か月多めに安静にしていたのでしょう……などと言っているのは私たちの視点は神のご計画からどんどん離れていきます。これもまた神のご計画の一つの「型」なのです。「五か月の間」とは150日間ということです。これはノアの大洪水によって地上のすべての生命が滅びた事実を指し示しています。

創世記【新改訳 2017】

7:23 …主は地の上の生けるものすべてを、人をはじめ、動物、這うもの、空の鳥に至るまで消し去られた。それらは地から消し去られ、ただノアと、彼とともに箱舟にいたものたちだけが残った。

7:24 水は百五十日間、地の上に増し続けた。

このように、「五か月の間」「百五十日間」とはすなわち神に聞き従わない者たちの滅びを意味するものなのです。ノアの時代にも確かにそれが起こりましたが、この事実は究極的には、世の終わりの大患難と呼ばれる時期を指し示しています。

また「安静にしていた」と訳されているのはハーヴァー(אָוּוּ)といい、本来は「木の間に身を隠す(創世記 3:8)」という意味で、大洪水の中、木で造った箱舟の間に、その中に隠れ、滅びを免れたノアの家族のように、滅びの中を通るものの、守られる、つまりやがて起こる大患難という史上最大最後の災いの中にあって守られる、というイスラエルの民に対する神のご計画が、このエリサベツが「五か月の間、安静にしていた」という記述には表されているのです。

3. イスラエルの王

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:26 さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。

1:27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアといった。

1:28 御使いは入って来ると、マリアに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

1:29 しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。

1:30 すると、御使いは彼女に言った。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。」

1:31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。

1:32 その子は大きいなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

1:34 マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」

1:35 御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

1:36 見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。」

1:37 神にとって不可能なことは何もありません。」

次に場面は大きく変わって、御使いガブリエルはナザレのマリアのもとを訪れます。御使いは彼女にこれから生まれて来る男の子、イエシュアについて知らせます。イエシュアとは誰か、どのような御方で、何を成されるのか、御使いはマリアにイエシュアについて宣べ伝えています。つまりこれは私たち教会で言うところの伝道です。しかしその内容は、今日の教会のそれとは大きく違っています。御使いの伝えた内容には、イエシュアが癒しや悪霊追い出し、パンを増やしたり、水の上を歩いたり、嵐を鎮めたり、死人を生き返らせたりといった奇蹟を行うことは述べられていません。さらには十字架にかかれ、死んで三日目によみがえられることさえも、その説明には含まれていないのです。なぜでしょうか？それは御使

いに御言葉をたくした神が、常に終わりを、ご自分の計画のその完了、完成を見ておられるからです。その神がイエシュアとは何かをこのように定義し、その存在について説明しておられるのです。

イエシュアとは…

- ① 大いなる者
- ② いと高き方の子
- ③ ダビデの王位に着く者
- ④ 永遠にヤコブの家を治める者
- ⑤ 聖なる者
- ⑥ 神の子

この六点が神がイエシュアについて説明しておられることです。私たち教会は人々に対し、この世に対して、この六点をもれなく伝えているでしょうか。これ以外のことばかりを伝え、私たち自身さえもこれ以外のイエシュアについての御言葉ばかりに目を留めてはいないでしょうか。特に③と④にある、イエシュアがイスラエルの王であること、そしてその王国が永遠に続くことについては、まったくと言っていいほど宣べ伝えていないし、また私たち自身もその事実を目を留めていません。しかし神は、イエシュアが最終的にそのような存在となることにのみ目を留めておられるのです。イエシュアの奇蹟や十字架、そして復活もその「型」やプロセス、途中経過に過ぎないのです。つまり私たち教会は神が見るようにはイエシュアを見ていないし、御使いが、神が伝えるようにはイエシュアのことを宣べ伝えていないのです。この事実をみなさんはどう思われますか。

4. 六か月

ここでイエシュアがイスラエル王国の王であることを表している、強調している記述は他にもあります。それは「六か月」という言葉に秘められています。この言葉は単なる時制を表すものではありません。ガブリエルはザカリヤに対しては「見なさい…あなたは口がきけなくなり…」というしるしをもって神のご計画がイスラエルの民を「束ねる、集める」ことにあることを示しましたが、このマリアに対しては、ザカリヤの妻エリサベツを指して「見なさい…不妊と言われていた人なのに…六か月です」と言って示しているからです。ではこの「六か月」には一体どのような意味が込められているのでしょうか。これについてエステル記に次のような御言葉があります。

エステル記【新改訳 2017】

1:1 クセルクセスの時代、クセルクセスが、インドからクシュまで百二十七州を治めていた時のことである。

1:2 クセルクセス王がスサの城で、王座に着いていたころ、

1:3 その治世の第三年に、彼はすべての首長と家臣たちのために宴会を催した。それにはペルシアとメディアの有力者、貴族たち、および諸州の首長たちが出席した。

1:4 王は彼の王国の栄光の富と大いなる榮譽を幾日も示して、百八十日に及んだ。

「六か月」とはつまり「百八十日」のことです。この解釈は先ほどの「五か月」150日と同じです。上記の箇所は「百八十日」という日数が記された聖書で唯一のもので、そしてその日数にはこのように「王国の栄光の富と大いなる栄誉」を示す、という出来事が指し示されているのです。先に述べた「五か月」すなわち150日が、終わりの時代の大患難を指し示しているならば、この「六か月」とは、その後にイエシュアが地上再臨され、その王国、イスラエル王国が建てられ、その「王国の栄光の富と大いなる栄誉」を示す、ということが表されているのです。このように、聖書の記述にはただの数字にさえも神のご計画を指し示す意味が込められているのです。

5. 救い

さらに言えば「その名をイエスとつけなさい」と言われた、イエシュア(יֵשׁוּעַ)という名前自体にもヤコブの家を治めるイスラエルの王たる存在が表されています。この名前には「救い」という意味があることとはご存じだとは思いますが、その最初の言及を見てみますと、

創世記【新改訳 2017】

49:18 【主】よ、私はあなたの救いを待ち望む。

この御言葉はアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが語った、祈った祈りです。彼はその死の間際に十二人の息子たちに対してこのように語りかけます。

創世記【新改訳 2017】

49:1 ヤコブは息子たちを呼び寄せて言った。「集まりなさい。私は、終わりの日におまえたちに起こることを告げよう。」

49:2 ヤコブの子どもたちよ、集まって聞け。おまえたちの父イスラエルに聞け。

この御言葉からも神のご計画が「終わりの日に」イスラエルの子らを集めることにあることがわかります。それではどうぞ今創世記 49 章を開いてみて、そして「【主】よ、私はあなたの救いを待ち望む。」という御言葉がどこにあるか確認してみてください。…お解りいただけるでしょうか、この御言葉はイスラエルの息子たち一人ひとりに対する預言のちょうど真ん中に、まるで一本の釘が突き刺さるような形で記されているのです。

「主よ私はあなたの救いを待ち望む。」

- ・ガドへ…
- ・アシエルへ…
- ・ナフタリへ…
- ・ヨセフ※
- （マナセとエフライム）へ
- ・ベニヤミンへ…
- ・ルベンへ…
- ・シメオンとレビへ…
- ・ユダへ…
- ・ゼブルンへ…
- ・イッサカルへ…
- ・ダンへ…

ヤコブの遺言（創世記四十九章）

主の「救い」であるイエシュアを中心としてヤコブの家、イスラエルの民が集められる、そのような技法がこの創世記 49 章のヤコブの遺言には施されているのです。またさらに言えばヤコブは「救いを待ち望む」と言いましたが、ここに使われているカーヴァー(קָוָה)とは本来、「一つ所に集まる(創世記 1:9)」という意味で訳される言葉なのです。つまり「【主】よ、私はあなたの救いを待ち望む」とはすなわち、**イスラエルの民はみなイエシュアのみもとに集められる**、という神のご計画を指し示す御言葉なのです。それが「終わりの日に」イスラエルの民に「おまえたちに起こること」として示されているのです。このように、イエシュアとは、イエシュアという名には、イスラエルの中心すなわちイスラエルの主、ヤコブの家を集め、治められる王なる御方、という意味があるのです。それが、それこそが神が提示しておられる「救い」というものの実態、その内実なのです。この事実、真実に対し、あなたはどう思われますか？この解釈を否定しますか？あるいはわからない、難しいと言って拒絶しますか？当の本人であるマリアは何と言ったでしょう。

6. 主のはしため

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:38 マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。

御使いが携えてきた御言葉に対し、マリアもまたザカリヤ同様、驚きと恐れにとらわれました。私たちはみな、思いもよらない出来事、理解できない状況に陥った時に驚き、恐れ、真つ暗な部屋に閉じ込められて、恐れを感じるのには周りが見えない、状況が把握できないからです。つまりマリアは御言葉を、それが指し示す状況、神のご計画を理解できなかったのです。しかし彼女はそれでも、たとえ理解できなかったとしてもこう言ったのです。「どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と。なぜマリアはこのように言うことができたのでしょうか。それは彼女は自分が「**主のはしため**」であることを自覚していたからです。はしためとは奴隷のことです。奴隷は主人に対して絶対服従です。反抗することはもちろん、主人に意見することさえも許されません。ただ従うのみです。マリアのこの覚悟、この姿勢は「神の国」の民の姿勢、生き方の「型」というべきものです。

またはしため、奴隷とは人ではなく、主人の持ち物、その財産の一部という扱いです。かつてアブラハムは主が示された地に行けとの命を受けた時、彼の財産のすべてを携え引き連れて旅立ちました(創世記 12:5)。主人とともに、主人に連れられて旅をする物(者)それが奴隷、はしための本来の定義、その存在の意味するところです。つまり「**主のはしため**」主の奴隷とは、神である主にこき使われ、強制労働をする者のことではありません。それは主のもの、主の財産として携えられ、連れられて、主が目指しておられる地へと、ともに行く者のことです。ですからどうぞみなさんも「私は主のはしため、主のものです」と告白してください。主イエシュアは必ずあなたをご自分の所有、財産、宝として携え、「神の国」へと導き上げてくださいます。